

第2章

春の選抜大会

新チームが始動し、初めての試合が行われる春の全国選抜大会の日がやってきた。丸井のひきつる墨谷ナインは、前年度の優勝校という名誉をひっそりさげて春の選抜にいどんだのであったが、新入生近藤のたび重なるエラーがあつて初戦で苦汁を喫してしまった。

2・1 帰校中のバスの中で…

敗戦のショックをひきずりながら墨谷ナインは学校に帰校しようとしていた。

島田「すわれよ近藤。疲れただろ。」

丸井「よけいなことをするな。そんなやろつがすわるガフかつてんだ。へまばかりしやがつてよ。」

イガラシ「いいかげんしなさいよ、キャプテン。さつきから近藤のせいにはかりしてるけど、おれたちにも責任があるんじゃないですか？」

丸井「お、おれたちが何をしたつてんだよ！」

イガラシ「どだい相手がどんなチームかも調べもしないで、選抜にのぞんだことじたいすでに敗因じゃないんですか。今日の試合にしたつて、相手ピッチャーが萎縮いしゆくしたから二点はとれたものの、それ以後一点もはいらなかつたじゃないですか。」

丸井「……。」

丸井「近藤のエラーさえなければその二点で勝つてたんだ。」

イガラシ「いや、たとえ勝つたとしても、すぐつぶされました。たしかにおれたちは名門青葉に勝つて優勝しました。しかしそれには谷口さんという青葉をよく知つた人がいたし、青葉に対する特訓までしたじゃないですか。ようするにたつた一つの目標に努力すればよかつたんですよ。しかし選抜ともなるとあらゆるチームに勝ちぬいていかなければならないんです。おれたち全国大会つてものを考えなおさなくちゃいけないんじゃないですか。」

丸井「……。」

イガラシの言葉を聞き突然に丸井は立ちあがつた。

加藤「どうしたんですか、キャプテン。」

丸井「おまえたち、先に帰つててくれ。」

丸井はナインには何も言わずに一人バスを降りた。取りのこされたナインは思い思いの気持ちで言葉を吐いた。

加藤「なあ、イガラシ。こういうときこそナインを勇気づけてひっぱっていくのがキャプテンのつとめじゃねえのか？」

イガラシ「あの人にそこまでのぞむのはムリだよ。」

加藤「そのキャプテンがふてくされちゃつてよ。」

小室「ぶつ。」

加藤「おれはとつていついていく気はないね。」

小室「まったく。」

イガラシ「よせよ、グチを言つただけじめになるだけだ。」

小室「それより、いつもやる試合後のミーティングはどうするんだ？」

高木「キャプテンがいらないんじゃないしょうがねえよ。」

島田「このまま解散するか。」
 加藤「まあまあよ、キャプテンが帰ってくるまでおれたちだけでもミーティング
 してようじゃないか。」
 小室「そつだ。…だけど…みじめだね。」

2・2 ひとりぼっちの丸井

バスを降りた丸井はイガラシに言われたことを思い出していた。「相手が
 どんなチームかも調べもしないで、選抜にのぞんだことじたいすでに敗因
 じゃないんですか。」

丸井「くそつ、キャプテンのおれが人前でわめきちらし、近藤一
 人のせいにしやがって！ おれはしょせんキャプテンなんか
 やるガラじゃねえんだ…。なんてダメな男だ……。」

丸井はひとりになってようやく冷静になることができた。近藤ひとりに試合の責任をおしつ
 けようとしたこと、試合後も負けたたはらいせをみんなにあたりちらしたこと…。そういえば
 相手チームのキャプテンは試合中味方ナインにいろいろ声をかけていた…。前キャプテンの谷
 口さんだったらこんな時どうするんだろう…。いろいろなことが頭をよぎっていった。

丸井「そつだ！」

丸井は反対側車線に行き、今きた方向とは逆のバスに乗った。丸井の行った先は先ほど試合
 が行われた球場だった。球場内で見学をしているチームを探していた。

丸井「あ、あ、あ、墨谷の丸井ですが、キャプテンいますか？」
 生徒A「ちょっとまってください。」

太田「キャプテンの太田です。さっきの試合はおしかったですね。で、なにか？」
 丸井「じつは練習試合を申し込みに来たんです。」

太田「はあ？ いいですね。でも場所が……。」
 丸井「ウチのグラウンドでもいいし、こちらからおたくのほうに出向いてもけっ
 つです。」

太田「出向くって、北海道までいらしゃれるんですか？」
 丸井「ホ…北海道だったんですか。それじゃムリだ。ど…どうも失礼。」

丸井は照れ笑いを浮かべてその場を後にした。北海道から選抜にのぞんだチームのナインか
 らは笑い声がもれた。

生徒A「なんだい、あのキャプテンはおもしろい人だね。ウチがどこの出身かも知
 らないです。」

太田「笑いごつちやないぞ。」

生徒B「はあ……。」
 太田「普通、試合に負けりや、二、三日はがつくりくるもんだ。それをたつた今
 試合に敗れたっていうのに、すぐ練習試合を申し込むなんてちょっとできる
 ことじゃない。」

生徒B「そついや、そつだつた。」

生徒A「うむ……。」

太田「おれたちも、あなりたいものだ。」

丸井は球場内をテクテクと歩き、練習試合ができそうなチームを探した。

丸井「あ…これもダメだ。九州じゃな…。くそつ、なんとしても次の全国大会で
 優勝するためには、あらゆるチームに通用するように、練習試合ができる学
 校をみつけなくちゃ。」

丸井は球場内をつぶさに歩いてまわった。



2・3 試合後のミーティング

丸井は帰りのバスの中で今日交渉した相手チームを確認していた。

丸井「えーと……。選抜から九校と、見学にきていた学校が二十七校、しめて三十六校か……。みんなたまげるだろうな。」

丸井が部室のドアを開けた。

丸井「よう、待たせたな。なんだ、ミーティングを始めていたのか。ああくたびれた。」

加藤「よかったです。このままつづけさせてもらっていいですか。」

丸井「ちよつとまで、その前に大事な知らせがあるんだがな。」

加藤「われわれも、大事な事を話しあってるんですが。」

丸井「な……。なんだい、その大事な事って？」

加藤「大変言いにくいことなんです……。丸井さんがキャプテンとして不資格ということが多数決で決まりました。欠席裁判のようになってしまいました。丸井さんが帰ってこなかったのです……。」

丸井は一瞬驚くも、今日のことを問われたらしかたがないと感じた。

丸井「……だろうな。たしかにキャプテンとしては適格じゃない。おれってカーッとなって頭に血がのぼると何もわからなくなっちゃっただからな。で……誰に決まったんだい？」

加藤「それを、これから決めるところなんです。」

丸井「じゃあ、おれがいたらやりづらいだろうから帰る。」

丸井は帰ろうと部室のドアに向かって歩き始めた。

丸井「あ……その前に頼みがあるんだがな！ 実は帰りがけにバスの中でイガラシに言われてなるほどと思ってよ。あれからひきかえして練習試合を決めてきちゃったんだがな、おしつけるようで悪いんだが、ムリに頼んだところもあるんでよ、キャプテンになる者はなんとかがそれを実行してほしいんだが……。そうしてくんねえとおれの立場なくなっちゃうんだよ。わかるだろ。ここにスケジュールが書いてある。じゃ頼むな。」

丸井がドアを開け部室から出て行った。取りのこされたナインは先ほどの話し合いの続きをおこなった。

加藤「じゃあ、キャプテンを誰にするかなんですが……。」

イガラシ「その前にこの中にキャプテンになれるやつがいるのか、話しあったほうがいいんじゃないのか？」

島田「し……しかし、どんなときにも冷静であるべきキャプテンがああ感情にはいる人でいいのかな。」

小室「うーむ……。」

イガラシ「おれたちは丸井さんのことをどうのこつこのいつたがよ、チームのこれからのことを考えたやつがおれたちの中にいたか？」

加藤「そついや、おれたちがこつしているあいだに丸井さんは走りまわっていたんだな。」

ナインは静まりかえった。そして長い沈黙が続いた。

加藤「やっぱり、キャプテンは丸井さんしかないのかな……。」

遠藤「だろうな。」

加藤「よし、もう一度みんな丸井さんに頼みにいこう！」

島田「うむ。」

墨谷ナインは全員で丸井の後を追いかけた。

「丸井さん。」

イガラシ「キャプテンを続けてください。」
丸井「ええっ、おれにキャプテン続けるだつて。だ、だけど...」
イガラシ「お願いしますよ。もう一度キャプテン引きつけてください。」
丸井「てめえら、あげたりさげたり勝手だなめ。」
「お願いします。」

丸井「ま、考えとくよ。」

